



企画展「大正昭和くらしの博物館——民族学の父・渋沢三三とアチック・ミュージアム」
 2001年3月～6月開催



渋沢三三が中国を旅した時に
 採集した玩具

ゲスト ● 渋沢雅英

渋沢栄一の曾孫。渋沢三三の長男。1925年ロンドン生まれ。東京大学卒業。貿易会社ロンドン支店勤務後、退社してNPOの仕事に専念。東京女学館前理事長。財団法人渋沢栄一記念財団理事長。著書に「父・渋沢三三」実業の日本社など。

ホスト ● 出口正之

文化資源研究センター。国際NPO・NGO学会会長。

対談

NPOと呼ばれるまで

栄一、敬三、雅英と続く渋沢家は、日本で有数のフィランソロピスト(慈善事業家の家系)である。

民博が敬三のつくったアチック・ミュージアムの収蔵物を継承していることを知る人は多いが、敬三の長男である渋沢雅英氏が日本のNPOの草分け的存在であることを知る人は、それほど多くないかもしれない。出口正之教授(文化資源研究センター)が、渋沢雅英氏に話を聞いた。

民博と同じ四つの顔をもっていたアチック・ミュージアム

出口 民博は博物館、研究所、大学共同利用施設、大学院教育の四つの顔をもっています。この四つの顔をもつ民博のおもしろさを出すのが「月刊みんぱく」の役割だと聞いたときに、真っ先に渋沢さんのお話を伺わねば、と思った次第です。

渋沢 それはまたどうしてなんでしょ
 うか。出口 民博のコレクションの淵源のひとつが、渋沢三三のアチック・ミュージアムであることはよく知られていますが、アチック・ミュージアムには多岐にわたる研究機能や、今という「共同利用」の機能をもっていました。アチック・ミュージアムと民博の関係については二〇〇一年春の『季刊民族学』九六号に特集があります。また教育という点でも、渋沢栄一は商法講習所を作った、これが後の一橋大学になりましたから、民博の四つの顔は、すべて渋沢家もついていたわけです。

世界に対して責務を感じていた人たちの出会い
 渋沢 当時はNPO・NGOという言葉もなかったですから、そこへ飛び込んだという意識はありませんでした。たしかに、非営利・非政府といえは、そうですね。私は、「第二次世界大戦後、日本はどうなるのだろうか」とずっと思っており、会社はそれなりにおもしろかったのですが、自分はこのことのために生まれてきたのか、企業人としての人生だけでは退屈ではないかと、とずっと感じていました。ロンドンでMRA(モラル・リアーメント)の活動に出会ったのです。彼らは「世界を何とかしよう」という国際的な発想をもっていて、ちよつとしたデイナーを催しても、一〇カ国ぐらいの人が集まって、一九五〇年代の英国でもそれは珍しいことでした。こうした大きな発想に「すこいことだ」と

特集

ひろがりゆく NPO・NGO

1995年。日本では阪神・淡路大震災に100万人を超えるボランティアたちが結集し、「ボランティア元年」と言われた。そしてそれが1998年のNPO法(特定非営利活動促進法)の成立につながった。また世界では、1990年5月に始まったジョンズ・ホプキンス大学非営利セクター国際比較プロジェクトを契機に、それまでボランティア団体や第三セクター、地縁・血縁集団など、いくつもの名前で呼ばれていたNPO(非営利組織)・NGO(非政府組織)が、NPOセクターという概念でひとつにくられた。

一方、文化人類学者たちが、あちこちで国際協力や環境保全のための活動に携わるNPO・NGOと遭遇し、彼らの異文化に対する無理解に疑問を感じる場面もふえてきた。そのため、人類学者が自らNPOを立ち上げ、研究対象である異文化社会の援助に向かうケースも少なくなりました。今や、さまざまな社会的課題を解決する鍵になりつつあるNPO・NGOは、学問としても研究の対象になり始めている。今回の特集では、いくつかの角度からNPO・NGOのひろがりに光をあてた。



2003.10.21(第28学校にて) モビの手によって届けられた真新しい黒板の前に並ぶ子どもたち



2002.8.20 東京学芸大学教育学部付属世田谷小学校5年生4人が「黒板子ども大使」としてウブル・ハイランドのアルグラント郡の10年制学校を視察訪問し黒板を贈呈した

(NPO法人モンゴルパートナーシップ研究所(MoPi=モビ)の活動。モビは松原正毅教授と小長谷有紀教授らによって設立された。



米国ミズーリ大学でおこなわれた「日米実業史観」展示会

まかり通っていますが、あれは「王冠協会」とでも訳すべきNPOなんですよ。そこでのマイケル・フアラデーの講演録は、「ろうそくの科学」という文庫本で日本人にも親しまれています。そこにも、一般の方が科学史に残る質点が載っています。

出口 チャタムもロイヤルですね。

出口 そう、日本では王立国際問題研究所といわれて、それでNGOなんです。だからNGOはわかりにくい(笑)。

渋沢 MRAの活動でロックフェラー財団と出会って驚いたのは、ひとつの大学にたいして一八年間もずっと支援していることでした。MRAにとって小さな活動ですが、イースト・ウエスト・セミナーという名前で、スマートの学生に大学進学のための奨学金をだしていたのです。

出口 雅英さんは渋沢栄一が設立した東京女学館の理事長もされてましたね。

渋沢 渋沢栄一も発起人の一人でしたが、設立者というほどではありませんでした。チャタムハウスの後、州立のアラスカ大学で教えていたときに、東京女学館の理事長を頼まれて、そろそろ日本に帰るころかな、と思っただけから……。

出口 私が驚いたのは、「女子の教育を振興し、将来吾邦の男女をして人生当然享有すべきの福利を完せしめ、兼ねて社会の秩序国家の進歩に裨益あらん事」を願って、渋沢栄一がつくった女子教育奨励会を、現代のNPO法人として雅英さんが二〇〇一年に復活なさったことです。

渋沢 東京女学館で戦前の日本女性のことを研究している人がいるのですが、日本の女性に対する扱いはひどいんですよ。少しは知っていましたが、記録を見ると、とにかくまったく人権がない。栄一は「何とかしないと」と思ったわけですが、現在もそれほど女性の状況が変わったわけではありません。私の娘はコロンビア大学で教えていますが、日本に帰ってこない。居場所がないのですよ、日本では。日本の女性が米国で「エロ」(博士号)をとると、その八割は帰ってこない。頭脳流出の最たるものです。

出口 民博には頭脳流出をさせないようにする責任もありますね。

渋沢 米国の大学ではたいい女性問題研究所のようなものがあります。木全ミツさん(元国連公使)が中心にな

って、女子教育奨励会を復活させようとするのを私も手伝いました。

出口 この明治のときの女子教育奨励会の会員リストを見ると、すごいですね。

渋沢 実業界、皇族、外国人、学者、軍人、旧大名家、閣僚、官僚、薩摩もいる。西南戦争からわずか八年後ですよ。奨励会は、日本でいうNPOという言葉がびつたりしますね。

出口 そのNPOを二世紀に雅英さんが復活させた。これは渋沢家の歴史を考える上でも興味深いことだと思っています。NPO活動のミーム(文化遺伝子)は渋沢栄一から、敬三を飛ばして、雅英さんに受け継がれているのではないかと。

渋沢栄一にとっての儒教とNPOの関係の研究

出口 今後の活動についてはいかがですか。

渋沢 渋沢敬三は、実業史博物館を作りたいという夢もっていました。実業史そのものはまだ学問としての実績をもっていませんが、膨大な資料が国文学研究資料館にあります。

出口 民博と国文学研究資料館は法人化に当たって、同じ人間文化研究機構という法人になっています。

渋沢 そうなんですか。昨年、同館の収蔵品を使って米国ミズーリ大学で「日米実業史観」という展示会をおこないました。また渋沢栄一記念財団では、

※MRA(モラル・リアーマメント)◇「軍備の再武装ではなく道義と精神の再武装を」とフランク・ブックマン博士が1938年に提唱。ロンドンにてMoral Re-Armamentとして発足。現在も国際NGOとして活動している。
●太字(ゴシック)の部分、サラモンズ・ハイヤーの「非営利セクターの定義」に基づいて、NPO・NGOと言える組織である。

思いました。私は金持ちの家に生まれましたが、当時は破産しておりまして、妻子を養わないといけない。ある意味ではああいう家庭に生まれて甘かったのかも知れませんが、心を揺り動かされたことは間違いないですね。彼らは、世界に対して責務を感じているのです。それは新鮮な発見でした。

MRAは、給料をくれませんでした。アメリカにつれていってトレーニングをさせてくれました。そこから世界に出て優秀な人につばい出会いました。彼らは世界の見方が断然大きいのです。これはかなわんと思っ

「知的水準」とは、
こういふことかと思つた

出口 今の若者がNPO・NGOに入っているのと同じですね(笑)。それにしても、NPOの世界に身を投じようとする雅英さんの行動に対して、強く反対する敬三さんを雅英さんの奥さんが、説得するところが「父・渋沢敬三に生き生きと描かれていますね。渋沢 私にとってもドラマチックでした。MRAで世界を回った後、大いに山っ気を出して、MRA国際会議場として小田原アジアセンターを作って、それを運営するだけで大変な仕事でしたし、どうせするならばおもしろいことをやろうと。今ではそれほど珍しいことではありませんが、日本人が外国人と一緒に泊まりがけで英語の「Three



渋沢雅英氏

「Three」(宿泊研修)というプログラムを企画するのだけれど、次々と予想しなかった新しい展開が……。

出口 池田勇人など、当時の政財界のそうそうたる人が設立に関わっていましたね。

渋沢 そういふ人を引っ張りこむだけの力はありません。アジアセンターで剰余金が出ると、東南アジアとの交流に使い始めたわけです。一九七一年にタイで大丸百貨店が進出したときに、

排日運動がおこりました。米国や欧州の人々も呼んで、世界の中で日本とタイのことを考えようと、セミナーを開催したのです。そこで山本正さん(日本国際交流センター理事長)に出会った。彼は国際会議の天才です。彼は彼に任せさせておけばよいと思うようになりました。彼についていけば、



出口正之教授

世界のいろんな人に会えて、議論ができるわけですから。

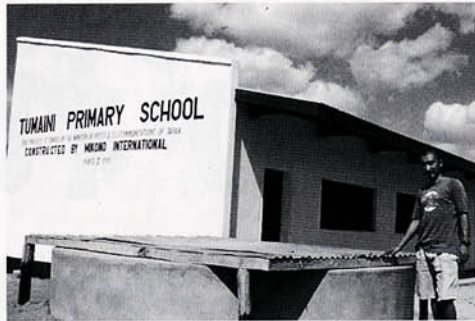
そうこうしているうちに、外務省が英国のチャタムハウスへいけというので、四年いました。ここは、すごかったですね。ロナルド・ドーアなど世界一流の学者が、月一回手弁当でやってきて、私のペーパー(論文)を読んで議論してくれるんです。「知的水準」というのは、こういうものかと思っ

出口 耳がいたい(笑)。

渋沢 チャタムハウスには大きな講堂があつて、一般の方が来られる。なかなかいい質問がきますね。

英国のロイヤル・ソサエティも実はNPO

出口 有名なロイヤル・ソサエティは、日本語では「王立協会」という訳語があるんですけど、



日本のNGOがケニアのガリッサに建設した学校

NGOと人類学者
一九九一年五月、私はケニア北東部のタン川沿いの砂道で、日本人らしき人々の乗った車とすれ違い、思わずブレーキを踏んだ。そこは、ソマリアとの国境に近く避難民が多いだけではない、ソマリアと隣接民族との紛争によって治安の悪いところであった。まさか日本人がいるとは思わなかった。



学校へ行くことを望まない遊牧民の子ども、ガリッサ周辺にて

彼らは、ミコノの会という日本のNGOで、ソマリ遊牧民が多いその地域で小学校建設などをしていく人たちであった。私は、ちょうど遊牧民キャンプのフィールドを探していて、このあとミコノの会が学校を建設した村に関心をもちことになる。しかし当初、遊牧民は移動すること望ましいと勝手に決めていたので、定住化や近代化を促進させようとするNGOのやり方には疑問をもっていた。NGOの人々もまた、私がいま町をみずにブッシュへばかり行っているのを不思議に思っているようであった。

その後、彼らはソマリアの文化を理解しないと何もうまくいかないと言ふようになり、私もまた学校に行くことを望む遊牧民に出会い、考え方が変わってきた。文化人類学者とNGOは、決して対立するものではなく協力しあえるものである。私たちのケースで言えば、昨年、「遊牧民に学校を、ケニア北東部ガリッサで活動する日本のNGO」という映像作品を製作して、近く民博のビデオテークで公開することになった。

人類学者が

NGOと出会ったとき

池谷 和信 (いけやわかつむ) 民族社会学研究部

住民も少なくない。この衝突のなか、先住民側にとって支援してきたのが、イグギア(本部はコペンハーゲン)とサバイルインターナショナル(本部はロンドン)という二つの国際NGOである。イグギアは、現地の住民にGIS(地理情報システム)の使い方を教えて、地名から土地の歴史を復元している。サバイルインターナショナルは、移住に歯止めをかけるためにロンドンや東京などの街頭での署名運動をおこない、ブラジルのヤノマミ地域で成功をおさめた戦略をボツワナの事例に適用している。

市民社会論への新しいアプローチ

小川 晃弘 (おがわあきひろ) ハーバード大学自米関係プログラム上級研究員



ハーバード大学の中央図書館「ワイドナー図書館」。世界有数の蔵書をもつ

念頭において規範的なモデルを提示したり、スローガンとしてのシビル・ソサエティ(市民社会)を探るのではなく、草根の人びとが自由に組織する運動に注目し、もつと柔軟に、ダイナミックな社会プロセスとしてシビル・ソサエティをとらえてみたい。たとえば、日本社会で、阪神・淡路大震災後に注目を集めるようになったNPOというシビル・ソサエティで、人びとが、実際

に何を体験し、実践し、感じているのか。現在進行形の事象に対して、鋭い分析力を発揮する民族誌的フィールドワークをおこなう文化人類学は、これまでのシビル・ソサエティ研究に、新たな視点を加える可能性があるのではないかと考えたからだ。

か。そうした現場への知のフィールドバックが、私自身に課された大きな課題であり、また私自身がNPO研究を続ける大きな意味にもなっていた。

ハーバード大の新しいシビル・ソサエティ研究

現在、私が籍を置くハーバード大学は、米国におけるシビル・ソサエティ研究の一大拠点であるが、今、ここで新しい動きが始まっている。これまでの研究は主として政治学者がリードし、日本のケースについては、スーザン・ファア政治学教授をはじめ、フランク・シユルツ前日米関係プログラムアシエイトディレクター(現ニュージャージー州モンクレア州立大学特別学長補佐)、ロバート・ベカネンワシントン大助教授らを輩出してきた。

しかし、この研究に、文化人類学者が加わろうとしている。この五月、日本社会をフィールドとする文化人類学者によって、シビル・ソサエティへの新しいアプローチを探ろうと、ひとつのプロジェクトがスタートする。ハーバード大学アジアセンターからの研究助成金を受けて、同大学人類学社会人類学部長のテオドル・ベスター教授らによって主催されるもので、英国オックスフォード大学のロジャー・グッドマン教授やボストン大学のメリー・ホワイト教授など、欧米で日本社会の文化人類学的研究をリードする研究者の参加が予定されている。日本人人類学者として、私も参加する。

文化人類学によるシビル・ソサエティ研究は、まだまだ始まったばかり。しかし、その動きは確かなもので、今後、大きな展開が予想される注目の研究テーマなのだ。

を研究テーマとするのは、そんなに新奇なことではない。そもそも、「シビル・ソサエティ」という言葉を使わなくても、コミュニティやインフォーマルグループ、ネットワークなど、NPO研究における重要な調査項目は、文化人類学がこれまで得意としてきた分野であり、すでに膨大な民族誌が蓄積されている。NPO研究にとっては、非常に貴重な資料だ。

さらに、文化人類学とNPO、この二つはとても相性がいい。両者とも「現場での実践」が共通のテーマとしてあるからだ。文化人類学は、元来、人びとの具体的な実践に注目するフィールドワークのなかで、研究者自身が現場にどう関わっていくかを、ほかの社会科学に比べ、最も厳しく問い正してきた学問である。

実際、約二年間にわたる東京・下町の社会教育NPOでのフィールドワークの現場において、物静かな、ただ眺めているだけの研究者であることは許されなかった。絶えず混乱する現場で、私自身がこのNPOという社会運動体とどう関わるのか、何を実践するのかが、絶えず問われる毎日であった。そこには、単に調査票を配ったり、質問項目をあらかじめ準備しておこなうインタビューからは、決してわからない草の根の人びとの日常があった。さらに、自らのフィールドワークのなかで編み出された実践的知を、現場の仲間たちとどう提供し、共有するの